三重大学高等教育研究 2018，第25号，67－70頁

【ショートレター】

卒業論文を題材としたPBLデザインと授業効果†

中川　正*
三重大学人文学部*

PBLの事例シナリオとして用いられることの少ない論文を活用する工夫として，学生にとって身近な卒業論文を活用すること，および問題発見の契機としてではなく問題解決のプロセスの中で論文を活用することが有効であるとの仮説のもと，2017年度三重大学人文学部開講「アメリカの風土と地誌B」において，卒業論文をPBLシナリオとして組み込んだ授業デザインを構築し，その効果を分析した．地域研究をテーマとした4つの卒業論文を題材とし，その着想段階から完成に至るまでのプロセスを，自己学習とグループ学習を繰り返すことを通して追体験させた．その結果，授業が学生の意欲を高め，主体的学習力，批判的思考力，課題探求力を向上させたことが確認された．卒業論文を題材とすることの利点としては，素材として身近なこと，学生が自信をもって批判を加えることができること，および思考の流れに沿った事例シナリオの活用が有効であることが明らかになった．

キーワード：PBL，事例シナリオ，卒業論文，授業デザイン，効果分析

1.　はじめに

三重大学では，教育目標としての「4つの力」(「感じる力」「考える力」「コミュニケーション力」「生きる力」)の育成を進める手段として，課題解決を目的としたPBL（Problem-based Learning：問題基盤型学習）[1]の導入が全学的に進められてきた（杉山・松下 2018）．

医学教育を起源とする典型的なPBLは，学習の始めに問題のシナリオを提示し，その解決に向けた小グループ学習と個人学習を通して，問題解決レベルの知識の獲得を目指している．三重大学においては，分野を超えて事例シナリオを適用するための実践マニュアルを作成し，その後も事例の蓄積を進めてきた（三重大学高等教育創造開発センター 2007, 2011）．

事例シナリオの例としては，新聞，雑誌，テレビ番組，ウェブサイトなどが挙げられているが，論文を活用した事例はほとんど見られない．論文に批判を加えて課題を発見するという演習形態は，特に人文社会科学分野においては典型的であるが，PBLのシナリオの対象として論文が採用されることは少ない[2]．

PBL事例シナリオとして論文が利用されない理由の一つは，学生にとって論文が身近な素材と考えられていないことである．論文を理解するために必要な基礎知識不足により，学生が実感をもって内容を理解することに困難が伴う場合が多い．論文に批判を加えることを意識すると，論文の中身から学ぶというよりも，形式の「あらさがし」をする傾向が生まれ，そこから見い出す研究課題も，地に足がつかないものとなりがちである．

論文がPBLに活用されにくいもう一つの理由は，PBLにおいてシナリオが，「問題発見の契機として活用されるもの」という暗黙の了解にあるものと思われる．筆者が卒論指導を行っている地域研究においては，地域に潜む社会現象に，多様な側面から光を当てる可能性があるが，その中から一つの課題を選び，その課題に取り組むうえで考えられる多様なアプローチから一つを選択するといった思考のプロセス自体が，学生にとって身近に感じる対象となる．そうであるならば，学生が論文を作成するプロセスに沿って，論文を題材として活用するPBLの方が，問題発見の契機として活用するよりも学習効果があるのではないかと推定される．

前者の課題を解決するためには，学生にとって身近な素材である卒業論文を活用することが，後者の課題を解決するためには，問題発見の契機としてではなく課題の解決に向かう学生の思考過程に沿って論文をPBLの授業デザインに組み込むことが打開策となると推論される．本稿は，以上の仮説のもと，卒業論文を課題解決のための題材として組み込んだPBLの授業デザインを紹介し，その授業効果を検討する．

PBLを実践した授業は，2017年度後期人文学部開講「アメリカの風土と地誌B」である．活用した素材は，筆者がかつて指導を担当した学生たちが作成した卒業論文である[3]．筆者の指導学生が3年次に作成を義務付けられるゼミ論文も補助的に活用し，問題の着想からテーマ設定，データの収集，分析，文章の作成にいたる思考過程の促進を試みた．

2.　授業デザイン

授業は，アメリカの政治的，経済的，文化的なトピックから具体的な疑問を喚起し，学問の課題として設定して，自ら研究できる能力を獲得することを目的として構成された．月ごとに一つのテーマを扱い，10 月には「銃社会アメリカ」，11 月には「多国籍企業と NGO」，12 月には「ブルースとつくられた伝統」，1 月には「要塞都市」と合計 4 つのテーマで組み立てられた．10 月の題材を通して，論文の構成について，11 月には実証的分析法について，12 月には社会理論の適用について，1 月には多様なデータの活用法について学習させることをねらいとした．

学生には，学習支援システム（Moodle）に毎回課題を提出させた．それぞれ 10 点満点で評価し，フィードバックを行った．提出が遅れたり欠席したりした場合には，それぞれ 2 点減点することとし，それらの合計を平均して，総合評価とした．

2017 年度における受講生は 19 名であり，4 つの小グループを作った．1 つのテーマを扱う時にはグループを固定し，テーマの変更とともにグループ替えを行った．グループ内では，進行係(司会)，記録係，報告係（1～3）を決め，毎回役割を交替させた．

具体的な授業の進め方を，10 月を事例として紹介する．1 回目には，NHK による BS 世界のドキュメンタリー「銃と自由のアメリカ：銃規制に揺れる開拓の町」を見て，感想や疑問点などを分かち合った．自己学習課題として，銃問題を研究のテーマとするならば，どのような研究をしたいかを書かせた．

2 回目の授業に，この研究をするために，どのような背景知識が必要かということをグループで議論し，全体ディスカッションに導いた．学生からは，銃所持の現状，銃犯罪の歴史，犯罪件数の変化，銃販売に関する法律，銃に関する憲法や法律の規定，連邦議会，州議会，市議会の機能分担など，調べるべきことが出された．それらの疑問をまとめて答えるような映像教材を見たうえで，自分で研究を行う時には，それらの知識を自ら獲得する必要があることを教えた．そのうえで，序論，本論，結論からなる論文構成と，序論に目的と方法を書く必要がある旨を教え，課題として，銃のトピックで書かれたゼミ論文を読ませて，論評する課題を与えた．

3 回目の授業では，各自持ち寄った論評をグループ内で分かち合い，小グループでゼミ論文の良い点，改善点を書き出させて，全体ディスカッションへとつなげた．授業後の課題として，ゼミ論を発展させて作成した卒業論文を読ませて論評をさせ，第 4 回目の授業でグループディスカッションをした．さらに，授業後に，1 か月の授業で何を学んだかに関する振り返りの課題を出した．

このように，トピックからミニ論文に結び付け，それをさらに深めて卒業論文につなげていく過程を，学生たちも追体験しながら，学習を展開した．

3.　授業効果

授業の効果を，授業アンケートと，最終課題として提出させた「授業の振り返り」から分析する．

3.1.　授業アンケート

授業アンケートには受講生 19 人中 12 人が回答した．「総合的に判断して，この授業に満足できた」という項目，および「学業への興味・関心(意欲）が高まった」に，全回答者が 5 段階評価で最も高い「あてはまる」という項目に回答した(表 1)．授業に対して調べたり，尋ねたりする学生が多く，授業外学習時間で「30 分未満」はおらず，「30 分～1 時間未満」が 3 人，「1 時間～2 時間未満」が 7 人，「2 時間～4 時間未満」が 2 人であった．その結果，授業内容についての理解，および新しい知識・考え方・技術の獲得についても高い得点が得られた．その知識は，意識したり，実際に試したりという適用レベルにまで及んでいることがうかがえる．

この結果，成長したと思う項目は，「考える力」が相対的に高く，その下位項目として「批判的思考力」「課題探求力」が身についたとする学生が 9 人（75%），「幅広い

表 1.　授業アンケート結果（回答者数）

	1 あてはまらない	2 あまりあてはまらない	3 どちらともいえない	4 ややあてはまる	5 あてはまる	平均ポイント
授業に満足できた					12	5.0
内容について理解できた				6	6	4.5
知識・考え方・技術が獲得できた				2	10	4.8
興味・関心(意欲)が高まった					12	5.0
学んだことを意識・試してみた			1	4	7	4.5
調べたり尋ねたりした			1	6	5	4.3

教養」「論理的思考力」が身についたとする学生は 8 人(67%) であった.「コミュニケーション力」の下位項目では,「討論・対話力」が身についたと感じる学生が 10 人(83%) と多く，グループワークの成果が表れている.「感じる力」の下位項目では「主体的学習力」が身についたと回答した学生が 10 人（83%）となっている(表 2).

3. 2.　授業の振り返り

学生に最終課題として Moodle に提出させた振り返りをもとに，卒業論文を題材として活用した効果に関する分析を行う.

①身近な素材

卒業論文自体が身近で魅力ある題材であることを学生が言及している.

・過去の先輩たちの論文を読んで論評し，実際に章立てを考えてみるというのは，主に二年生が多いこの授業においてとても有効だと感じました.

・2 年生の後期の時点で卒論についての基本的なことを知ることができたし，実際に卒論を読むことができたので，すごくためになった. 発表後の感想で，学生の話を聞いてから先生の話を聞くときに，学生の話が間にあるため，その分先生の話がより聞きやすかったように感じて良かった.

・今まで卒論を読む機会がなくどのようなものなのかわからなかったが，授業を通して，授業で使用したり課題で読んでいくうちにテーマであったり，構成であったり，どのように考察で締めくくればいいのかなどがわかった. 卒論を考え書くための準備がこの授業でできたのでよかった. また，自分だったらどのようなテーマにするのかとか元々のテーマからどのように発展させればよいのかということを考えることにも慣れることができた.

・卒業論文を読むことにより，卒業論文がどのようなものか知ることが出来たのが大きかった. 様々なテーマについて取り扱われており，かつテーマごとにそれぞれ今後研究をする上で役立つことを学ぶことが出来て良かった. 卒業論文という学生が書いたものを取り扱うことで批判もしやすく，より良いものを作るにはどうすれば良いか分かって良かった.

②自信を伴った批判が可能

卒業論文が自分と同じ立場の学生が書いたものであるために，自信をもって等身大で批判を加えることができたと学生は評価している.

・一つの論文について，学べる点，改善した方が良い点に着目しながら読むことで，正直，以前なら表記の揺れや語彙に違和感を持った時点で悪い先入観を持って読み進めてしまっていたと思うが，そういった点にあまり重きを置かずに，内容に集中して読めるようになり，新たな視点が得られたと思う.

・批判する・疑問を持つする力が身についた. 毎回テーマごとに卒論を論評する課題があったが，論文に書かれていることをすべて受け入れるのではなく，ここは改善するべきだと考え，どうしてこう考えるのか疑問を持ちながら読むようになった. また，逆に取り入れていきたい点を見つける着眼点を身に着けることが出来たと思う.

・卒論の論評は大変だったが，4 年生になるまでに卒論の書き方を学び，取り入れたい点や注意すべき点が分かったので良かった.

・論文や本はとにかく正しいと思い込んできたが，読んでみると気になる点も見つかったし優れている点も見つけることができたので，ただ読むのではなく考えてよむ思考力がついたように感じる.

・毎回論文を読み論評することで，何気なく読むのではなく，良い点，改善点を常に意識しながら読むという力（習慣）がついたように思われる.

・学生が書いたものを読んでいたことで，どういった点が良いのか，または悪いのかという点を挙げやすいと感じました. またプロが書いたわけではないため，自分の方が間違えているという意識を持たずに問題点を挙げることが出来ました.

表 2.　授業を通して身についた「4 つの力」（回答者数）

	0 全く成長しなかった	1 わずかながら成長した	2 少し成長した	3 ある程度成長した	4 かなり成長した	平均 ポイント
感じる力		1	2	6	3	2.9
考える力				4	8	3.7
コミュニケーション力		1	2	5	4	3.0
生きる力		3	1	6	2	2.6

③思考の流れに沿った卒論活用の有効性

問題発見の契機としてではなく，課題発見や課題解決のプロセスに沿って卒論を活用した授業の工夫は，学生の思考の深化につながっていたという評価が得られた.

・この授業は全体を通し，テーマ内容に関する知識と，論文の書き方，常に二つのことを学ぶことができる展開になっていました.

・毎週の課題とその内容を利用した授業という流れになっていて，課題をこなすだけにならず，考え方を深めていくことができました. 活動が多く，より実践的な力をつけられ，また，授業ごとに確実に何かを学べる授業でした.

・この研究は，概要や実態を調べたあと，そこから考えられる問題点を見つけるという流れになっていました．そしてこの方法は，自分の研究を行う際にも利用したいと思いました. また，根拠やデータを豊富にし，主張に信頼性を持たせる大切さも学びました.

・授業を通して卒論の構成はどのように書かれるべきなのか，また色々な卒論を読むことで面白い視点や調査方法などを発見することができ，自分のテーマならどのような方法で研究すればいいかなどの引き出しを増やすことが出来た.

4.　結び

論文をPBLシナリオとする工夫の一事例として，三重大学2017年度人文学部開講「アメリカの風土と地誌B」の授業において，専門家による論文ではなく卒業論文を活用すること，および，問題発見の契機としてではなく，学生の思考の深化に伴って論文を活用する授業デザインを開発した.

授業の効果分析より，授業が学生の学業への意欲を高め，自己学習とグループ学習の相互作用を通して，授業内容の理解を高め，新しい知識・考え方・技術の獲得を導いていたことが明らかになった. 主体的学習力が高まり，グループワークを通して討論・対話力を獲得し，批判的思考力，課題探求力を延ばしていた.

卒業論文を題材にすることの利点として，素材として身近であることが学生によって指摘された．同じ立場の学生の書いた論文であるがゆえに，受講生は自信をもって書かれたことに疑問を持ち，批判を加える姿勢が育っていた. また，問題発見の景気としてではなく，思考の流れに沿った卒業論文の活用が，問題解決レベルの思考を促している一端も明らかになった.

本稿は，論文をPBLに組み込む一つの工夫を示したものであるが，今後の課題としては，①論文を問題発見の契機として活用する可能性を開拓すること，および，②問題解決ステージで活用した卒業論文を，新たな問題発見に誘うPBLデザインを開発することが考えられる.

注

1) PBL教育の定義は多様であるが、三重大学では，①問題基盤性（具体的問題を通した学習深化），②学習自己決定性，③能形性的評価，の3要件を満たす教育手法であるととらえている(三重大学高等教育創造開発センター 2011, p.6).

2) 三重大学がモデルとしたデラウエア大学の教員たちが編集したテキストでは，研究論文を題材として活用したPBLとしてWhite(2011)の1例が紹介されている.

3) 筆者が担当している演習や卒業論文指導においては，ゼミ論文や卒業論文が公開を原則とするものであることを教え，「後輩が読むことを前提として書くように」と指導している．もちろん，公開を望まない学生に対しては本人の意向を尊重している．授業においては，原則として「過去の学生の論文」として，筆者名を削除した形でMoodleに掲載し，受講生にのみ読ませる形をとっている.

参考文献

杉山芳生・松下佳代（2018）「PBL(Problem-Based Learning)の他分野展開における変容－三重大学を事例として－『大学教育学会誌』40(1),73-82.

三重大学高等教育創造開発センター (2007)『三重大学版Problem-based Learning実践マニュアル－事例シナリオを用いたPBLの実践』三重大学高等教育創造開発センター.

三重大学高等教育創造開発センター (2011)『三重大学版Problem-based Learningの手引き－多様なPBLの展開』三重大学高等教育創造開発センター.

White, H. B, III (2011) A PBL course that uses research articles as problems. In Dutch, B. J. et al (Ed.), *The Power of Problem-Based Learning*, Sterling, Virginia: Stylus Publishing, 131-140.

---

† Tadashi Nakagawa*：The course design and effects of the problem-based learning using graduation theses as scenarios.

* Faculty of Humanities, Law and Economics, Mie University, 1577　Kurimamachiyachou Tsushi, Mie, 514-8507 Japan.